



ヨルガオ

109 編は 指揮者によって。ダビデの詩。賛歌 と端書きにあります。この詩を大きく3つの部分に分けて、読んでみます。

第1部は わたしの賛美する神よ／どうか、黙していないでください(1) との嘆願で始まりまず。詩人の問題点は 神に逆らう者の口が／欺いて語る口が、わたしに向かって開き／偽りを言う舌がわたしに語りかけます。憎しみの言葉はわたしを取り囲み／理由もなく戦いを挑んで来ます。(2) と、嘘、偽り、憎悪、不条理を言う口を持つ人々に攻め立てられているという点にあります。このような人々は 愛しても敵意を返し／わたしが祈りをささげても／その善意に対して悪意を返します。愛しても、憎みます。(5) と述べているように、相互に通じ合わず、それどころか、反発で返してくる人々であり、極めて強い緊張関係を生み出すのです。詩人はそれに対する神の答えを求めています。

第2部は 彼に対して逆らう者を置き／彼の右には敵対者を立たせてください。(6) と、それらの人々を決して許さず、断固たる態度をもって、一人一人を裁いて下さいと祈ります。さらに段落をつけて、驚くべき呪詛の言葉が並びます。ダビデの詩 と感じることはできませんが、傷つけられた者の心の奥底に秘めている深層心理が、赤裸にされているのが、等と思わずにはられません。彼(神に逆らう者)は地位を失い、早死にし、子らは放浪して物乞いし、助ける者もなく、子孫が断たれ、その名も断たれるようにと言います。呪詛する理由は 彼は慈しみの業を行うことに心を留めず／貧しく乏しい人々／心の挫けた人々を死に追いやった。(16) からだと述べます。詩人は 彼(神に逆らう者)が貧者、弱者に対して暴虐であり、殺戮したと弾劾しているのです。そして、彼の悪事がそのまま彼の身に降りかかるようにと願っています。わたしに敵意を抱く者に対して／わたしの魂をさいなもうと語る者に対して／主はこのように報いられる。(20) と、神の裁きがあることを信じています。

第3部は、彼を呪詛し、因果応報を求め、報復のため絶滅を願ったこれまでの言葉とは大きく違っています。まるで、詩人が正気に戻ったかのようです。主よ、わたしの神よ／御名のために、わたしに計らい／恵み深く、慈しみによって／わたしを助けてください。／わたしは貧しく乏しいのです。胸の奥で心は貫かれています。移ろい行く影のようにわたしは去ります。(21) と、詩人は心の痛みと苦しみで喘いでいます。そして、わたしは人間の恥。(25) と、どこにも救いを得られないと、惨めさで一杯です。黙していないでください との詩人の願いは聞かれたのでしょうか。詩人は わたしはこの口をもって／主に尽きぬ感謝をささげ／多くの人の中で主を賛美します。(30) と最後に言っているように、詩人の この口 が呪詛したこと虚しさ、愚かしさを通して、御心を知ったのではないのでしょうか。詩人は 彼らは呪いますが／あなたは祝福してください(28) と、神の言葉と人間の この口 との違いをはっきりと知ったのです。わたしの神、主よ、わたしを助けてください。慈しみによってお救いください。／それが御手によることを、御計らいであることを／主よ、人々は知るでしょう。(26) と、人の力ではなく、神の 御手 によってのみ、救いがあると悟り、感謝しています。

『讚美歌 21』には関連讚美歌はありません。ジュネーブ詩編歌はオルガンとリコーダーによる重奏です。 <https://www.youtube.com/watch?v=th7GAELg6vE&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=109>